中世和化漢文資料に現れる漢語声点の揺れ
—『新猿楽記』弘安本・康永本・古抄本の比較から—

加藤大鶴

1　はじめに

中世の和化漢文資料には、伝統的な漢音声調や呉音声調に基づかない声点がしばしば現れることが知られる（加藤大鶴 2006）。そうした例の中には、概ねどの資料においても同じ形で現れる安定性を持つ場合や、異なる形であっても音韻環境等によって説明される連続性を持つ場合を含みながらも、なお説明のつかない個別的・臨時的な姿が現れることもある[*1]。漢籍や仏典などのように宇音学習の伝統性を背景に持つ高い位相の資料に比べて、和化漢文資料には学習の弛緩やそれがもたらす語への馴染みの低さによって、どうしてもそうした例が含まれてくるものと推測される。漢語声調・アクセントやその史的変化を考えるためには、安定的な例を見据えておく必要があるが、だとすると手続き上、どのような環境で安定的な例と個別的・臨時的な例として現れるのかが問題となるだろう。

本稿ではこの問題について考えるために、和化漢文資料『新猿楽記』の弘安本・康永本・古抄本を用いる。これら三本に差される声点には同一の漢語になされたものが多数あり、比較には都合が良い。まず、三本それぞれの漢語声点の特徴を論じた上で、三本の漢語声点を比較することを通じて安定的な例と個別的・臨時的な例がどのような環境に現れるかを検討したい。

2　資料について

2.1　『新猿楽記』の声点について

『新猿楽記』は藤原明衡の撰と伝えられる和化漢文の文献で、その内容は往来物の一種とされる。本文献には当時の人事全般にわたる事物の名称や所作が列挙されるため、語彙集に似た性格を持ちながら、しかもその語彙が記録語彙のほか俗語や生活語彙を多く含む点に語彙的特徴がある（酒井憲二 1975 による）。本稿では語彙の分類を行うことはしないが、そうした特徴を持つ語彙が使われたの

*1 沼本克明 1997, pp.215–271、佐々木勇 2009, pp.675–732。また石山裕慈 2011 では『本朝文粋』の諸本に現れる声点を比較することで、個別的・臨時的な姿が存在することを指摘する。加藤大鶴 2009、2010 でも和化漢文の漢語声点について、韻書や呉音資料との比較を通じて分析を行っている。

は必ずしも学問の伝承の場のみではなかろうから、人口に膾炙した日常的な発音とのつながりが期待される。さて、『新猿楽記』には尊経閣文庫に三本の古写本、弘安三年（1280）抄本、康永三年（1344）抄本、古抄本（書写年代不明）の存することが夙に知られる（前掲酒井論文）。2010 年に刊行された尊経閣善本影印集成（前田育徳会尊経閣文庫 2010）にはこれらの古写本のカラー影印が収められるが（本研究もこの影印本に依拠している）、三本への訓点について山本真吾 2010 に概略的な分析がなされており、声点がいつの時代の音調を反映するかを考える重要な手がかりとなる。以下に、山本論文に従いながら三本の声点について、その概略を言及しておきたい。

まず、弘安三年抄本（以下弘安本）の声点は墨筆二筆の圏点である。墨筆には主たるものの他に別筆による加点もある。前者は仮名字体から「鎌倉時代中期から後期の様相を呈する」（前掲山本論文）とされ、奥書に示される書写の時期（「弘安三年三月一日／武州六浦荘金澤山稱名／寺弥勒堂谷書寫／事了」）から大きく外れないとされる。後者の別筆による声点を見分けることは必ずしも容易ではないものの「特定の箇所に集中する」（同論文）のである程度の腑分けは可能である。ただし本稿では両筆に質的な大きな違いが見られなかったので、分けて分析することはしていない。声点は 193 例、内訳は 1 字漢語 18 例、2 字漢語 159 例、3 字以上の漢語 15 例である。差声体系は六声体系の名残がみえる四声で、濁音表示のための双点がある。

康永三年抄本（以下康永本）の声点はほとんどが朱筆星点である。前掲山本論文では訓点には墨筆三種、朱筆二種とあり、声点は墨・朱に一種のみとある。奥書に「康永三年七月廿二日（中略）同廿三日移點了同廿四日朱點了同廿五日校合」とある二筆の移点が墨・朱筆による一種ずつの声点に対応すると述べられている。とすれば、康永本の声点は康永三年以前によるものとみなし得るだろう。墨筆声点の総数は 18 例、内訳は 1 字漢語 1 例、2 字漢語 15 例、3 字以上の漢語 2 例である。朱筆声点の総数は 403 例、内訳は 1 字漢語 32 例、2 字漢語 326 例、3 字以上の漢語 45 例である。また濁音表示のために双点が使われる。

古抄本は奥書がないため書写年代などの具体的な事情は不明であるが、本文は室町初期書写（酒井憲二 1975）、他本との異動から「弘安九年（1286）以前」（川口久雄 1983, p.348、および石上英一 2010）との二説がある。訓点には前掲山本論文にしたがえば、墨筆に三種、朱筆に一種がある。このうち声点を差すのは墨筆・朱筆それぞれ一種ずつとひとまずはみなせるようであるが、二筆は文献内の分布が相補的であることから、同一のものであるとの分析がある。これらの声点

を含む訓点は、仮名字体や返り点の形状から鎌倉時代後期頃のものと推定されている（以上、前掲山本論文）。墨筆声点の総数は 283 例、内訳は 1 字漢語 23 例、2 字漢語 227 例、3 字以上の漢語 33 例。朱筆声点の総数は 137 例、内訳は 1 字漢語 9 例、2 字漢語 121 例、3 字以上の漢語 7 例である。墨筆声点は二筆圏点、朱筆声点は星点で、どちらも六声体系の名残*2がみえる。本稿では先行研究に従い、分析の際には二種の筆を分けずに取り扱う。

2.2　声調体系について

声調体系を考えるためには、その手続として差声された漢字の読みが漢音か呉音かを峻別しておかなければならない。しかし音合符など外的な徴証や、網羅的な仮名音注等がない場合、その決定は難しい。旧稿では韻書や呉音資料*3との一致と不一致を用いて峻別を行ったが、この方法のみでは漢音と呉音の判別が困難である。本稿では基本的には川口久雄 1983 の読みに従いながら、仮名注や他文献も利用して推定語形を設定した。この推定語形を随時援用しながら、必要に応じて漢呉の判断を行うことにした（本稿では紙幅の都合でいちいちの例について推定語形を掲げてはいない）。

さて、弘安本には差声位置が壷左下平声点よりやや高く東点と認められる例が 5 例、同様に右下入声点よりやや高く徳点と認められる例が 7 例存する。康永本では東点が墨筆に 1 例、朱筆 1 例存し、徳点は認められない。古抄本では東点 23 例、徳点 23 例が存する。これらは全体の差声数からすると 5 %に満たないわずかな数である。弘安本、古抄本のみが、移点のもとの本で六声体系であったものが、差声体系をよく理解しない移点者が関わることによってこうした差声状況

---

*2 六声体系では差声されていた平声点よりやや高い位置の東点が、四声体系の枠組みによって移点されることで、平声点の位置に差されてしまう事例が、鈴木豊 1986 に指摘される。しかし本稿で扱う資料への声点体系は四声体系に基づくとは言えないだろう。ただ、2.2 節で扱うように東点、徳点が一定程度見えつつも全体の数から言えば十分に六声体系を理解していたかには疑問が残る。そのような意味で「六声体系の名残」とした。

*3 漢音資料として用いたのは『大宋重修広韻』（澤存堂本を底本,1008 年）である。これに『韻鏡』に基づく音節頭子音情報を合わせ、本稿では便宜的に韻書と記す。呉音資料として用いた影印と参考情報は次の 5 資料である。『金光明最勝王経音義』（『古辞書音義集成 12　金光明最勝王経音義』汲古書院,1981 年）、『観智院本類聚名義抄』和音・呉音…鎌倉初期写（『天理図書館善本叢書　観智院本類聚名義抄』八木書店,1976 年, 参考：沼本克明「呉音・漢音分韻表」『日本漢字音論輯』汲古書院,1995 年）、『九条家本法華経音』（『古典保存会複製本所収　九条家本法華経音』,1936, 参考：沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院,1982 年）、『法華経音訓』（『日本古典全集』所収, 参考：島田友啓編『法華経音訓漢字索引』古字書索引叢刊,1965 年）、『保延本法華経単字』（『保延本法華経単字』古辞書叢刊刊行会,1973, 参考：島田友啓編『法華経単字漢字索引 』古字書索引叢刊,1964 年）

となっていると考えられよう。以下に具体例を掲げる[*4]。

弘安本：（東点）「紫金菅」上東○/シキンカウ [弘 023/07]、「宮世」東上/エイセイ [弘 017/15]、「深窓」平東 [弘 017/06]、「天下」東平 [弘 017/07]、「民烟」平東/○エム [弘 011/07]、**（徳点）**「叡岳」○徳/エイカク [弘 024/08]、「過失」去徳/クワシチ [弘 008/08]、「廿竹」平徳/カン▽ク [弘 023/10]、「合夕」入徳/○シヤク [弘 011/07]、「出人」○徳濁 [弘 015/11]、「短弱」去徳濁/○シヤク [弘 018/03]

康永本：（墨筆東点）「會稽」B クワイケイ B 東東 [康 087/14]、**（朱筆東点）**「間」R 東 [康 100/07]

古抄本：（東点）「灰煙」B 東平/B クワイ○ [古 065/12]、「官使」B 東去濁 [古 065/12]、「弓箭」B 東平/B キウ○ [古 070/07]、「供給」B 東入濁/B クキウ [古 057/12]、「興販」R 東平濁/○ R ヘン [古 054/13]、「古風」B 去東/B コ▽ウ [古 063/04]、「皇鑾」B 平東濁/B ワウシヤウ [古 074/02]、「詩賦」RR/BR 東去 [古 059/01]、R 東去 [古 059/05]、「弱冠」R 入濁東/B シヤクワム [古 053/08]、「青黛」B 東平濁/B ▽イタイ [古 064/10]、「村邑」B 東入/B ソンイウ [古 073/08]、「天」B 東 [古 052/15]、「天下」B 東平濁 [古 058/04]、「天性」B/R 東○/R 上平濁 [古 052/07]、「風浪」B 東平 [古 070/06]、「奉公」R 去東 [古 053/08]、「方士」B 東○ [古 062/05]、「豊顔」R 東平濁/R ホウ○ [古 055/05]、「幽閨」B 東○/B ▽ウケイ [古 064/14]、「養風」B 上東/B ヤウフ [古 067/10]、「戀慕」R 去東濁 [古 054/06]、「飄颻」R 東平/B ▽ウ○ [古 058/02]、**（徳点）**「安楽塩」B 平徳上 [古 074/03]、「一墨」B ○徳濁/○ B ホク [古 068/06]、「一列」R ○徳/○ R レツ [古 052/12]、「格式」R 入徳/R キヤク B ▽キ [古 059/04]、「額」B 徳濁/▽ B ク [古 068/06]、「窮屈」R 平徳 [古 055/06]、「憲法」R 去徳濁 [古 059/04]、「合夕」B 入濁徳 [古 057/13]、「七出」B 徳徳 [古 065/09]、「消息」R 去徳 [古 059/03]、「勢徳」R 去徳 [古 053/09]、「成熟」B 去濁徳濁 [古 057/09]、「束把」B 徳上 [古 057/13]、「播殖」R 去濁徳/R ハムシヨク [古 057/03]、「麦菽」B 徳濁上/B ミヤクシ/B ハク○ [古 067/10]、「明法」R 去徳濁 [古 058/15]、「夜發」B 去徳/○ B ホツ/○ B ハツ [古 067/06]、「理髪」B 去徳/B リハツ [古 059/14]、「療疾」B 去徳/B ▽ウ▽ツ [古 062/01]、「六儀」B 徳入濁 [古 063/15]、「壹徳

---

*4 以下、具体例は声点/仮名音注、出現箇所の順に掲げる。出現箇所は、尊経閣善本影印集成 42 の影印本ページ数および行数を示す。該当する声点や仮名音注がない場合は○とした。仮名音注の部分記述は記されていない部分を▽で示した。また古抄本＝古、康永本＝康、弘安本＝弘と記すほか、墨筆＝ B、朱筆＝ R としている。この他、他文献も必要に応じて参照する。《名義》＝『観智院本類聚名義抄』、《和名》＝《和名抄』諸本、《古今》＝古今集声点本、《色葉》＝『前田家三巻本色葉字類抄』、《解文》＝『尾張国郡司百姓等解文』諸本を示す。

塩」B 徳徳平/○○ B エム [古 074/03]、「旱 魃」B 去徳濁 [古 057/09]、「躰 骨」R 上徳/R テイコツ [古 052/06]

以上、東点・徳点が差される漢字はほぼ漢音に基づく*5。一部の問題例を除けば、これらの音節頭子音を調べてみると中国語音韻学でいう全清・次清に属するものであることが分かる。東点の音環境を見ると、まず弘安本と康永本は全てが、そして古抄本は 23 例中 19 字が 2 拍字である。また古抄本では 23 例中 17 字が語頭環境に出現している*6。東点で表記される例が 2 拍字、語頭環境に残りやすいことはすでに佐々木勇 2009, pp.596-601 に指摘されており、本文献にてもそれが確認されたことになる。

3　声調型の分布

声点と実音調の問題について触れておく。先行研究に従い、平声点＝低平調（1 拍は低拍・2 拍は低拍連続）、東声点＝下降調（1 拍は下降拍・2 拍は高低）、上声点＝高平調（1 拍は高拍・2 拍は高拍連続）、去声＝上昇調（1 拍は上昇拍・2 拍は低高）、入声点＝低平調（1 拍は低拍・2 拍は低拍連続）、徳声点（1 拍は高拍・2 拍は高拍連続）とみなすが、主として康永本に本来入声点が差されるべきところに平声点や上声点が差される例もある（弘安本には 1 例ずつ）。とくに唇内入声字に平声点や上声点が差されており、鎌倉時代以前に入声韻尾を写したフが開音節化し平声や上声と区別できなくなったことを反映する（小松英雄 1971, pp.647-698）。

弘安本：「班 給」去濁上濁/ハムキウ [弘 011/06]

康永本：「移 牒」R 平平/淡 B イ○ [康 090/11]、「給 料」R 平平 [康 091/03]、「憲 法」R 去平 [康 090/13]、「大 業」R 去平濁/淡 B ○ケウ [康 091/03]、「班 給」R 去平/B ハ [朱去濁] ンキ [朱上濁] ウ [康 089/02]、「符 牒」R 上平/淡 B フテウ [康

*5 呉音の疑いがあり問題となるのは、東点では「供給」B 東入濁/B クキウ [古 057/12]、「皇 鑾」B 平東濁/B ワウシヤウ [古 074/02] の 2 例である。「供給」クギウは呉音形である。呉音の単字声調を調べると平入であり、尾張国解文にも平入濁で現れるため、本文献の例は誤写の可能性がある。「皇鑾」ワウジャウの第 2 字も第 1 字の音形からは呉音と推測されようが、これだけでは字音の系統を特定できない。《色葉》に平平濁で現れるから、これも誤写の類か。徳点では「成熟」B 去濁徳濁 [古 057/09]（ジャウジュクか）、「合夕」B 入濁徳 [古 057/13]（ガッシャクか）、が呉音形である。「合夕」は《色葉》に入濁入カッシャクとある。「旱魃」B 去徳濁 [古 057/09] の第 2 字は漢音であれば濁音字であり、不審である。

*6 康永本は 4 例中 3 例が語頭環境、弘安本は 5 例中 2 例のみ語頭環境であるが、全数が少ないので傾向を述べることは差し控える。

平平 19 平東 2 東平 1	平上 15	平去 7	平入 4 平徳 1
上平 5	上上 7	上去 1	上入 0
去平 10	去上 19	去去 3	去入 3 去徳 1
入平 4	入上 0	入去 0	入入 2 入徳 1

表 1　弘安本　全 105 例

平平 2 東東 1	平上 0	平去 0	平入 1
上平 0	上上 1	上去 0	上入 0
去平 0	去上 1	去去 0	去入 0
入平 0	入上 0	入去 0	入入 0

表 2　康永本（墨筆）　全 6 例

090/12]、「立印」R 平平 [康 101/05]

この事象から、本資料の声点は字音の知識を離れた音調を写し取っている可能性が高いと言えそうである。そこで、以下では本資料に現れる「中低形」の出現率を見る。一語のなかに音調の高さを二つ以上持ち音調の谷間を有する形、つまり東去、東東、上去、去去、徳去の組み合わせは字音声調の組み合わせとしてはあり得るが、一語の安定のために中低形が回避される事例が先行研究で指摘される（石山裕慈 2005・2009・2011、加藤大鶴 2009・2010 ほか）。単字の声調を生かした結果生じる中低形は字音学習の伝承の力に依るものであったとされ（佐々木勇 2009, p.613）、中低形が回避されるということはその伝承の力を離れて日本語アクセントの力学に委ねられることを意味しよう。表 1〜4 では、二字漢語のうち全体差声であるものを抜き出し、その声点の組み合わせを一覧にして掲げた（数字は異なり語数、中低形には網掛けをしてある）。

さて、四つの表を見ると、いずれにおいても三本とも中低形はかなり少ないことが分かる。ここで中低形となっている個別例について、ひとつずつ検討してみたい。

まず弘安本から述べる。上去で現れたのは「両鬢」上去/○ヒム [弘 017/17] である。古抄本にても同様の型で現れる。韻書にても上去である。去去で現れたのは「剛柔」去濁去 [弘 008/11]、「調和」去濁去 [弘 008/11]（古抄本にて去上で現れる）、「容貌」去去/ヨウメウ [弘 022/06]。いずれも呉音声調にて去去の組み合わせである。これらの例のうち、「両鬢」「剛柔」「容貌」は意味からして 2 字の結合が緩い段階にあるなどの理由で、単字の声調を生かしたかと思われる。

康永本（墨筆）の東東の 1 例「会稽」については 2.2 節にて触れた。康永本（朱筆）では、上去で現れたのが「妖艶」R 上去 [康 086/04] の 1 例である。この語

平平 71	平上 35	平去 20	平入 12 平徳 1
上平 15	上上 10	上去 1	上入 4
去平 34	去上 34	去去 2	去入 10 去徳 1
入平 16	入上 7	入去 4	入入 6 入徳 1

表 3　康永本（朱筆）　全 281 例

平平 52 東平 8	平上 26	平去 14 東去 3	平入 10 平徳 1 東入 3
上平 10 上東 1	上上 11	上去 1	上入 3 上徳 1
去平 32 去東 3	去上 33	去去 2	去入 10 去徳 10
入平 10 入東 1	入上 3	入去 2	入入 1 入徳 2 徳徳 1

表 4　古抄本　全 253 例

は韻書では平（全清音）去の組み合わせであり、色葉字類抄で平去であるから、本来は第一字が平声軽（つまり下降調）だったものが高く始まる上声に聞き間違えられたか。康永本において漢音読み漢語で第一字に上声が差されるものが 17 例あるが、韻書では上声が 9 例、去声が 2 例のほか、残りの 6 例すべてが平声の全清・次清音である[*7]。康永本（朱筆）の入声字が上述のとおり平声や上声に紛れやすいことと考えあわせれば、康永本が実音調を反映している可能性は高いと考えられる。去去で現れたのは「韻題」R 去去濁/B イン○ [康 090/14] は韻書で去全濁平、呉音声調は不明である。「宴丸」R 去去濁 [康 087/03] は韻書で呉音声調は去去であるから、単字の声調を生かしたか。

古抄本で東去で現れたのは、「官使」B 東去濁 [古 065/12]、「詩賦」RR/BR 東去 [古 059/01]・R 東去 [古 059/05] である。いずれも韻書で全清平去の組み合わせである。上去で現れたのは、「両鬢」B 上去濁/○ B ▽ム [古 065/11] のみで、弘安本と同様である。去去で現れた 3 例のうち、「好色」R 去去 [古 053/08]、「大業」B 去○/R 去去濁 [古 059/08] は第二字は徳声だったものを移点の際に位置を取り違えたものであろう[*8]。残りの「會稽」B 去去 [古 056/11] は誤写か。

こうして見ると、中低形ではないもののうちに、すでに中低形を回避した例が混入しているのではないかと推測される。そこで漢音と思しき例から、上平で現れるものを選び、韻書で上去の組み合わせであるものを探すと、「海部」B 上

*7 「西収」R 上平 [康 088/12]、「甘州」R 上平 [康 107/10]、「匡衡」R 上平濁 [康 090/15]、「符牒」R 上平/淡 B フテウ [康 090/12]、「風波」R 上平 [康 102/10]、「妖艶」R 上去 [康 086/04] の 6 例である。

*8 「好色」は他資料に「かうそく上入・上入軽」《古今》、上入《色葉》とあり「色」字には本来徳点が差されるところである。

平/B ○フ [古 072/03] が該当する。これは中低形を回避して上去＞上平と変化したのではないかと考えられる。同様に本文献に去平で現れ、韻書で去去の組み合わせを探すと、以下の 6 例が該当する（漢音と思しき例で去去＞去上が想定される例はなかった）。これらは中低形を回避して去去＞去平と変化したことが推測される[*9]。

「運命」去平 [弘 023/15]、「近代」去平濁 [弘 012/14]・R 去平濁 [古 052/12]・R 去平濁 [康 091/03]・R 去平濁 [古 059/08]、「勝計」R 去平濁 [古 053/04]、「進退」R 去平濁 [古 054/12]・B 去平濁 [古 062/09]、「世路」R 去平 [古 055/06]、「戀慕」去平濁/レンホ [弘 008/05]

以上、声調型の分布を検討することで、六声体系の名残が色濃い古抄本には注意が必要なものの、本文献の声点は学習による規範の伝承を離れていることを確認した。

4　三本の比較

漢語に差される声点は、経験的に和語に比して多くの揺れが伴うことが知られている。もちろん揺れの伴わない安定的に現れる型もあり、それらは漢語アクセント史を担いうると考えられるが、揺れを伴う語であっても必ずしも野放図に揺れるわけでもなく、一定の枠組みの中で揺れていると推測される。ここでは三本を比較することで揺れる語群と揺れない語群を分けた上でどのような語環境に揺れが目立つかを分析し、揺れの範囲と揺れを生じさせた要因について考えたい。

まず分析の方法について述べる。3 文献の漢語のうちある程度まとまった数で現れる二字漢語を対象とし、仮名に開いた語形に基づき 2 拍漢語（1+1 拍）、3 拍漢語（1+2 拍・2+1 拍）、4 拍漢語（2+2 拍）に分ける。その上で三本を比較し、一致不一致を声点の組み合わせ別に見てゆくこととする。

なお、以下に掲げる表では、各本の比較にⓐⓑⓒの記号をあて、その数（異なり語数）を示した。「古抄本・康永本」は左項が表の縦軸、右項が横軸に対応する。表の網掛け部分は一致数を示している。

- ⓐ古抄本・康永本の比較
- ⓑ古抄本・弘安本の比較

*9 こうした中低形回避のパターンは加藤大鶴 2009 にて論じたことがある。詳細は 4.4 節でも触れる。

- ⓒ康永本・弘安本の比較

また、表では入声字との組み合わせについては取り上げていない。東点は平声に含めて例を数えている。

拍数別に検討する前に、資料ごとにどれくらいの一致率を示すかについて概略を見ておきたい。古抄本・康永本で重複した漢語は 78 例、うち声点が一致する（濁音表示の有無は捨象）のは 45 例で、一致率は 58 %（小数点以下は四捨五入）である。古抄本・弘安本で重複した漢語は 37 例、うち声点が一致するのは 19 例で、一致率は 51 %である。康永本・弘安本では重複した漢語は 46 例、うち声点が一致するのは 28 例で、61 %である。古抄本・弘安本における差声状況の一致が他の比較よりも若干少ないが、概ね過半数を超えているという点で同程度の一致率であるといえる。

4.1　2 拍（1+1）

	平平	平上	平去	上平	上上	上去	去平	去上	去去
平平	ⓐ1ⓑ1			ⓐ1	ⓒ1				
平上		ⓐ1ⓑ1ⓒ1							
平去	ⓐ1								
上平									
上上					ⓒ1				
上去									
去平				ⓐ1					
去上	ⓐ1	ⓐ1ⓑ1			ⓐ1ⓑ2			ⓐ1ⓑ1	
去去									

表 5　2 拍語（1+1）

3 種の一致率は、ⓐ33 %（3/9）、ⓑ50 %（3/6）、ⓒ66 %（2/3）である。全体の数が少ないが他の拍との比較のために掲げておく。

さて、表 5 の不一致例からは、二つのパターンが見て取れる。一つ目は語頭の去声と上声に揺れるパターンである。去平・上平のⓐ1 は「五四」（R 去濁平/R クシ [古 056/03]・R 上濁平/B クO [康 086/15]）、去上・上上ではⓐ1ⓑ2 が「巴豆」（B 去上濁/B ハツ [古 072/19]・R 上上濁 [康 106/05]・上上濁/ハツ [弘 023/07]）、「家治」（R 去上濁/R ケO [古 054/14]・上上 [弘 017/15]）である。これらは、一方が去声を残し、もう一方は去声拍が日本語における曲調拍衰退の

影響を受け、上昇調から高平調に変化したこと（金田一春彦 1964, p.344）を反映すると考えられる。

二つ目は去上と平上を揺れるパターンである（去上・平上のⓐ1ⓑ1 は「画女」B 去濁上濁/B クワ○ [古 063/10]・R 平濁上濁 [康 096/02]・平濁上濁/クワ○ [弘 016/08]）。去上の低く始まり高に続く音調が曲調拍の衰退とともに低高と把握されたと考えられる。

揺れの要因が不明なものとしては、平去・平平ⓐ1 の「詩賦」（BR 東 RR 去 [古 059/01]・R 東去 [古 059/05]・R 平平 [康 090/10]）がある。この東去は取扱い上、中低形となることも問題であるし、康永本の平平についても六声体系を四声体系で写しとった結果、東去＞東平となったものが四声体系の枠組みで平平となっているのかもしれない。韻書からは全清平去であり漢音であることが分かる。また《古今》にも○去がある。非語頭の去声は保持されにくいが、語の意味は詩と賦であるから、語構成が影響して一字ずつ独立的に発音されたか。もう一つは平平・上平ⓐ1 の「健兒」（B 平平/B コムニ [古 070/11]、R 上平/B コニ [康 103/01]）[*10]である。この語は韻書で去全濁平、呉音資料から平去であり、語形に基づけば呉音、原音声調の組み合わせから言えば康永本などは漢音と説明が付きそうであるが、いずれにせよ、康永本と古抄本の揺れについて事情は不明である。平平・上上ⓒは「家治」（R 平平濁/B ケ○ [康 098/04]）が問題である。2 字とも韻書では平声であるが「治」が濁音であれば呉音の可能性が高い（仮名注と声点は筆が異なる）。

以上、揺れの説明が付くものを一致に含めれば、ⓐ70 %（7/9）、ⓑ100 %（6/6）、ⓒ66 %（2/3）となる。

4.2　3 拍（1+2）

3 種の一致率は、ⓐ50 %（5/10）、ⓑ20 %（1/5）、ⓒ60 %（6/10）である。

表 6 の不一致例からも、表 5 と同様に二つのパターンが見て取れる。たとえば語頭の去声と上声に揺れるパターンでは、上平・去平ⓒ1 の「秀才」（R 上平 [康 091/03]・去平/シユサイ [弘 012/14]、古抄本では R 去○ [古 059/08]）があるが、二つのパターンが組み合わさった例もある。すなわち去上―上上と去上―平上（平去）の揺れが看取される場合である。去上・平去ⓐ1、去上・上上ⓑ1、

*10 語形はコニともコンニとも。川口久雄 1983 に従えばコニ。

	平平	平上	平去	上平	上上	上去	去平	去上	去去
平平	ⓒ2	ⓐ2							
平上	ⓑ1ⓒ1	ⓑ1							
平去			ⓐ2ⓒ1		ⓒ1				
上平	ⓒ1		ⓐ1ⓑ1	ⓐ1ⓒ1			ⓒ1		
上上		ⓑ1						ⓐ1	
上去									
去平							ⓐ1		
去上		ⓒ1	ⓐ1		ⓑ1			ⓐ1ⓒ1	
去去									

表6　3拍語（1+2）

平去・上上ⓒ1は「翡翠」（B去濁上濁/Bヒ○ [古064/08]・R平去/Bヒスイ [康097/01]・上濁上/ヒスイ [弘017/02]）である。また上上・去上ⓐ1、上上・平上ⓑ1、去上・平上ⓒ1は「雄黄」（B上上/Bヲワウ [古072/19]・R去上/Bヲワウ [康106/05]・平上/ヲワウ [弘023/07]）である。「翡翠」に非語頭に立ちにくい去声が現れるについては、2拍低高で実現したためであろう。

漢音と呉音とで揺れると思しき例もある。上平・平去ⓐ1、上平・平去ⓑ1の「輸税」（B上平濁/Bシウサイ [古057/14]・R平去/Bシユサイ [康089/04]・平去/シユサイ [弘011/07]）は、韻書で全清平去、呉音資料で去平の組み合わせとなる。「税」平声については《解文》に「税帳」平平、「正税」○平などがある。古抄本は呉音去平＞上平、康永本と弘安本は漢音平去かと思われる。

問題となるのは4例となる。平上・平平ⓑ1の「胡臭」（B平上/Bコシユ [古065/06]・平平//コシウ [弘017/12]）は、韻書で（全濁）平去、呉音では「胡粉」《色葉》に去○・コフン〈去濁上上〉俗、《和名》《名義》に去上であることなどから、「胡」は去声であろう。「臭」は呉音資料から平声であることが分かっている。「臭」は音形からも呉音シュ漢音シウであるから、古抄本が呉音、康永本と弘安本が漢音と認定したいところだが声点はむしろ逆の様相である。平平・平上ⓐ2の「呉山」（R平平/Bコサム [古058/14]・R平濁上/Bコ○ [康090/05]・平濁○コ○ [弘012/04]）は韻書全濁平全清平で漢音なら平平が望ましい。平上は由来が不明だが《解文》に～山に上声を差す例がある。平平・平上ⓐ2と平上・平平ⓒ1の「字行」（B平平/Bシカウ [古068/04]・R平濁上濁 [康100/10]・平濁平濁 [弘019/11]）は韻書で去全濁平、呉音資料で平去であるから、康永本と弘安本は呉音と考えられる。古抄本の平平は不明。上平・平平ⓒ1の「符牒」（R上平/淡Bフテウ [康090/12]、平平/フテウ [弘012/08] も揺れの要因を明らか

にすることは難しい。「牒」は入声だが平声で現れることはすでに3節で触れた。古抄本にB/R去○/R○入濁/B○テフ [古059/03] で現れるので、少なくとも「符」は去声の問題かもしれない。

以上、揺れの説明が付くものを一致に含めれば、ⓐ80％(8/10)、ⓑ80％(4/5)、ⓒ60％（6/10）となる。

ここで語頭1拍去声と上声の揺れについて、諸本の特徴に触れておきたい。4.1節と本節で見た「五四」「巴豆」「家治」「画女」「秀才」「翡翠」での揺れにおいて古抄本では全て語頭一拍去声を保つ。例外は「雄黄」のみであった。いま、三本の全例から語頭に限り1拍去声がどれくらい現れるかをみると（母数は1・2拍去声の延べ合計数）、古抄本墨筆27％（18/68）・朱筆23％（10/43）であるのに対し、弘安本17％（8/46）、康永本墨筆0％（0/3）・朱筆11％（10/92）と割合が低い。この点に着目すれば、古抄本の声点は他の2本よりもやや古い性質、あるいは字音学習の伝承性を強く持っていると言えそうである。

4.3　3拍（2+1）

	平平	平上	平去	上平	上上	上去	去平	去上	去去
平平	ⓐ6ⓑ1ⓒ3	ⓑ1ⓒ1							
平上		ⓐ8ⓑ3ⓒ4						ⓑ1ⓒ1	
平去									
上平									
上上	ⓐ1	ⓒ1			ⓐ1ⓑ1ⓒ1			ⓐ1	
上去									
去平	ⓐ1						ⓑ1	ⓐ1ⓑ1	
去上		ⓐ1						ⓐ1ⓒ2	ⓑ1
去去									

表7　3拍語（2+1）

3種の一致率は、ⓐ76％（16/21）、ⓑ60％（6/10）、ⓒ77％（10/13）である。4.1節、4.2節で検討した語頭1拍の群と比べて、数が多くまた一致率が安定して高い。

さて、この群について予測されることは、前節までに見られた傾向とは異なり、語頭去声は2拍低高で把握されるために上声や平声との異同が少ないだろう

ということであるが、全体数の少なさもあって必ずしもそうは言えない[*11]。前節までに検討した二つのパターンで見ると、語頭去―・上―に関わるのは1例のみ、上上・去上ⓐ1の「方除」（R 上上濁 [古 059/07]・R 去上/淡 B ○チ [康 091/01]）である。これを例外と見ても良いが、「方除」出現箇所の前行には「開方除」が現れる。古抄本では R 去○○/B ○ホウチ [古 059/06]、他本では R 去上上濁/B ○ホウチ [康 091/01]、○上○ [弘 012/13] で、古抄本には第2字以降差声はないが去上上で読まれたことと推測される。この上上部分を次行「方除」にそのまま差声したと考えることが許されるのであれば、この例外も消え、先の予測に沿った結果となる。

もうひとつのパターン、去上・平上に関わるのは、平上・去上ⓐ1ⓒ1の「蘭麝」（B 平上 [古 064/13]・R 平上濁 [康 097/06]・去上濁 [弘 017/05]）、去上・平上ⓐ1の「西施」（R 去上 [古 054/11]・R 平上 [康 085/08]）の2例である。

語頭2拍字の去―・上―で揺れる例がほとんど存せず、去上・平上の組み合わせは存するということは、去声の表す音声実態が2拍の低高として実現しており、高平調と紛れるような（声調としての）上昇調として実現したのではないことを意味する。だからこそ和語のような低起性を強く持ち[*12]、低く始まる音調型と揺れるのではないかと考える。

漢音に2音ありと思しき例には、去平・平平ⓐ1の「貫花」（B 去平/B ▽ム○/B クワンクワ [古 068/05]・R 平平 [康 100/11]）がある。韻書では「貫」は全清平声と去声があり、「花（華）」は全濁平声であるから、平平と去平の両方が現れえたのではないかと考える。呉音に2音ありと思しき例は上上・平上ⓒ1の「頻伽」（R 上濁上濁 [康 100/05]・「頻伽」平上濁/ヒンカ [弘 019/06]）である。呉音資料では平去と去去があり得るので、平去＞平上、去去＞上上の変化が考えられようか。漢音と呉音で揺れると思しき例は上上・平平ⓐ1の「長者」（B 上上濁 [古 067/06]・R 平平濁 [康 105/01]）である。「長」はこの意味では韻書で上声、呉音資料で平、「者」は韻書で上声、呉音資料で平となっている。つまり漢音なら上上、呉音なら平平となる。

この他に揺れたものは3例あるが、これらは1字目のみ同じ、2字目が揺れる

---

*11 たとえば去―・去―の枠に入ってくる例の数を見る。2拍 1+1 では、ⓐが 1/8（分母は各比較内の全体数）、3拍 1+2 ではⓐに 2/5、ⓒに 1/10、3拍 2+1 ではⓐに 2/22、ⓑに 2/5、ⓒに 2/14 であって、目立った点は見られない。ただ、4拍 2+2 ではⓐに 12/36、ⓑに 5/13、ⓒに 12/20 であり、語頭去声の安定度は格段に高くなっている。

*12 注13、参照。

パターンである。平平・平上ⓑ1ⓒ1の「龍飛」（B平平/Bリョウヒ [古 067/11]・R平平/Bリョウ○ [康 100/04]・平上/リョウヒ [弘 019/05]）、去平・去上ⓐ1ⓑ1の「経書」（B去平 [古 068/07]・R去上 [康 100/13]・去上 [弘 019/14]）、去上・去去ⓑ1の「調和」（R去濁上 [古 054/12]・去濁去 [弘 008/11]）が該当する。

以上、揺れの説明が付くものを一致に含めれば、ⓐ95 %（20/21）、ⓑ70 %（7/10）、ⓒ92 %（12/13）となる。

4.4　4拍（2+2）

	平平	平上	平去	上平	上上	上去	去平	去上	去去
平平	ⓐ5ⓑ2ⓒ1		ⓐ2ⓑ1		ⓒ1		ⓑ1ⓒ1	ⓐ1	ⓒ1
平上		ⓐ3			ⓐ1				
平去	ⓐ1	ⓒ2	ⓐ1ⓒ2						ⓐ1ⓑ1
上平	ⓐ1				ⓐ2		ⓑ1	ⓒ1	
上上				ⓐ1	ⓐ1		ⓒ1	ⓑ2	
上去						ⓑ1			
去平	ⓐ1						ⓐ6ⓑ2ⓒ3	ⓒ1	
去上	ⓐ1			ⓐ1	ⓑ1		ⓐ1ⓒ1	ⓐ5ⓑ3ⓒ5	
去去	ⓐ1								

表8　4拍語（2+2）

3種の一致率は、ⓐ58 %（21/36）、ⓑ53 %（8/15）、ⓒ55 %（11/204）である。4.3節の一致率に比べるとおしなべて約20 %ほど低い。この群は表8に見るように揺れに傾向を見出すことが難しい。いくつかのケースに分けて個別例を見ることとする。

まず漢音と呉音で揺れると考えられそうなものを掲げる。

- 「淫奔」（R去上濁/B平平/Bイン○ [康 100/03]・去平濁/インホン [弘 019/04]）、韻書：次濁平全清平、呉音資料で去去・去平、《色葉》平平
- 「剛柔」（R平濁去/R○ニウ [古 054/12]・R平平濁 [康 085/09]・去濁去 [弘 008/11]）、韻書：全清平次濁平、呉音資料：去去
- 「農人」（R平平濁/Bノウ○ [古 057/02]・R去上 [康 088/06]）、韻書：次濁平次濁平、呉音資料：去去

「淫奔」は康永本朱筆と弘安本が呉音であろう（康永本墨筆、《色葉》に平平あるがこれは漢音）。「剛柔」は康永本が漢音、古抄本と弘安本が呉音であろう。去上

と去平の揺れについては後述する。「農人」は古抄本が漢音、康永本と弘安本が呉音であろう。いずれかが漢音と思しき例で、他方との関係や字音系統が不明なものは以下である（漢音と一致する声点に下線を付した）。

- 「遊蕩」（B 平平/B ▽ウタウ [古 067/07]・R平去/B ○タウ [康 100/01]・平去/イウタウ [弘 019/03]）、韻書：次濁平去
- 「偃仰」（B 平上濁/B エムキヤウ/B ○カウ [古 067/10]・R上上濁/B エンキヤウ [康 100/03]）、韻書：上上
- 「軟錦」（B上濁上濁/B セムキム [古 073/04]・R上濁上濁/B セン○ [康 106/09]・去濁上/センキン [弘 023/10]）韻書：上上
- 「軟障」（B上濁平濁/B セムシヤウ [古 072/03]・R 平平濁/B 上濁上濁/B センシヤウ [康 105/03]・去濁○/セン○ [弘 022/11]）、韻書：上全清平、呉音資料：平平、《色葉》センシヤウ上上平平平/色葉
- 「豊顔」（R 東平濁/R ホウ○ [古 055/05]・B 上平濁/B ホウカム [古 065/16]・去平濁/ホカン [弘 018/04]）、韻書：次清平全濁平、《色葉》平平
- 「養風」（B上東/B ヤウフ [古 067/10]・R 上上/B 平○ [康 100/03]）、韻書：上全清平
- 「皇麞」（B 平東濁/B ワウシヤウ [古 074/02]・R平去濁[康 107/10]）、韻書：全濁平去

「軟錦」「軟障」とも「軟」は諸本でそれぞれ一定している。諸本ごとの読み癖といった要素も併せ考える必要があると考えられよう。「豊顔」の古抄本の朱筆東点はすでに触れたが、墨筆は下降調を上声に聞きなしたとすれば漢音か。以上は一方が漢音で、他が学習の弛緩、伝承の線上から外れてしまったものとひとまずは考えたい。説明が困難なこうした例は他にも 2 例ある。

- 「繧繝」（B 去上濁/B ウンケン [古 073/04]・R 平平濁/R ウンケン [康 106/08]・上上濁/○ケン [弘 023/10]）
- 「甘松」（B 去平/B カンセウ/B カムソウ [古 072/16]・R 平平 [康 106/02]）、韻書：全清平去、呉音資料：去○《色葉》平平

「繧繝」を表記する漢字は国字である。古辞書類でも「暈繝」「雲錦」がある。「暈」なら韻書で次濁去声、「雲」なら次濁平声となり、これが揺れとなって現れたか。後代の資料では上平濁であることからすれば、康永本の平平濁から変化したかとも思われる。「甘松」は《色葉》平平に一致するのが康永本、古抄本は呉音形か

と思われる。

さて、前節までに立ててきた観点では、平去・平上ⓒ2の「営世」（R 平去/B エイセイ [康 098/04]・東上/エイセイ [弘 017/15]）、「勘文」（R 平去 [康 090/11]・平上 [弘 021/02]）がある。「営世」は韻書で次濁平去で、音形からも漢音とみなされるが、非語頭の去声が上声としても現れる。「勘文」は呉音資料に「文」が去声とあり、音形もカンモンとすれば、同様の揺れと考えられるだろう。語頭去声と上声の揺れについては「代稲」（B 上濁上/B タイタウ [古 057/11]・R 上濁平 [康 089/01]・去濁上/○タウ [弘 011/05]）は、韻書で去全濁上である。弘安本の声点は漢音に合致するので古抄本とは去上＞上上の関係かとも思われるが、語形から呉音とも考えられ、由来が不詳である。ここでは説明困難例に含めたい。

また、中低形の回避と解釈できる例もある。

- 「睚眦」（R 去濁上/R カヒサイ [古 054/06]・R 上濁平/B カイサイ [康 085/04]）、韻書：去去、《色葉》去平
- 「剛柔」（R 平濁去/R ○ニウ [古 054/12]・去濁去 [弘 008/11]）、韻書：呉音資料：去去
- 「形貌」（B 去濁上/B キヤウメウ [古 059/12] 他 1 例・R 去濁平/R ○メウ [康 091/07] 他 2 例・去濁上/○メウ [弘 013/16] 他 1 例）、呉音資料：去去

加藤大鶴 2006 では漢音の去声＋去声の連接において、去去＞去上が生じるケースを報告した。「睚眦」（ガイサイ）が漢音に基づいているとすれば、古抄本の去上はそれにあたると考えられる。《色葉》去平は後項を平声にして中低形を回避したのだろう。「形貌」も同様に、去去＞去上と去去＞去平が、「剛柔」も去去＞平去がそれぞれ生じたと考えられる。こうした変化は呉音声調資料に見られる連音上の変化（奥村三雄 1957）とは別の、日本語アクセントの次元に生じた複合変化であろう[*13]。3 節において韻書で去去、本文献で去平で現れる例が散見され

*13 去去＞平去が生じた要因は日本語アクセントの影響と見る。加藤大鶴 2009 でも触れたが、秋永一枝 1980, p.157 によれば和語の 2 拍＋ 2 拍の複合名詞のアクセントには、○●＋○●＞○○○●になる傾向が強く見られるとする。去去＞去平が生じた要因も同様に日本語アクセントの影響と見たい。上野和昭 2012 では、去声＋去声が去上または去平になる後項の異なるふるまいについて、後項の去声の持つ低起性の違いによるものではないかと推測している。去声が「連音上の変化」のために去声の後項で高平調化（上声化）しうる場合と、低平調で実現する場合とでは、同じく低起性を有する去声であるとするのでは説明が困難であるためである。上野論文によれば、高平調化する去声（拍）とは異なり、「韻尾が独立して二拍によまれる去声字は（明確な）低起性をもって二拍名詞第四類相当の語のように○●型になったと見られる」（（　）内は稿者による）とする。

ることもすでに述べたとおりである。

以上、揺れの説明が付くものを一致に含めれば、ⓐ69 %（25/36）、ⓑ60 %（9/15）、ⓒ85 %（17/20）となる。

ひとまず現れた声点型のいずれかを解釈したが、揺れについては相互の関係がほとんど不明なものも多い。また、揺れの説明がつくものを含めた一致率では、他の群に比してやや低い。3 拍漢語までの揺れは相互に連続的で説明可能なものが多かったが、4 拍漢語では一部を除いて相互に離散的・個別的なものがやや多いということになる。この要因は拍数の長い語のほうが変異を生じやすいという一般的な性質や、1 字ずつの独立性が高くなり呉音漢音の混読語が生じるなどして、学習による伝承線上から外れやすいものを多く含むためではないかと推測される。

5　まとめと展望

以上、述べ来たったことを以下にまとめる。

1. 古抄本に六声体系の名残がもっとも強い。
2. 古抄本に 1 拍去声字が多い。
3. 康永本に入声字に平声・上声点の差される例が多い。
4. 康永本に漢音で平声軽音節にあたる字に上声が差された例が見られる。
5. 三本とも中低形は少ない。中低形を回避したと思しき例も見られる。
6. 2 拍（1+1）には揺れの要因が音環境から説明できるものが多く含まれる。特に語頭の去声・上声、および去上型と平上型に揺れが目立つ。これらを一致に含めれば一致率は高くなる。
7. 3 拍（1+2）は 2 拍（1+1）と似た傾向を持つ。
8. 3 拍（2+1）にははじめから揺れが少ない。2 拍（1+1）・3 拍（1+2）に見られた語頭去声と上声の揺れはほぼないが、去上と平上で揺れる例はある。要因が説明できる揺れの例を一致に含めれば、一致率はかなり高くなる。
9. 4 拍（2+2）は 3 拍（2+1）に比して揺れが多い。要因が説明できる揺れの例は 1 例を除き音環境よりも漢音と呉音に亘る場合である。これらを一致に含めても一致率は 3 拍（2+1）ほど高くはならない。

2. からは古抄本の漢語声点が他本よりやや古い性格を持つと言える。5. からは三本が字音学習の伝承・規範から外れ日本語アクセントの影響を受けた性格を

基本的に持つと考えられる。そのなかでも 3. と 4. からは康永本が特にその性格を強く持つと言えそうである。これらのことは 2.1 節で触れたように、古抄本声点が先行研究の述べるとおり弘安九年（1286 年）以前移点で、康永本声点（1344 年移点）が後代であるという先行研究の指摘と矛盾しない。

6-9 からは二つのことが言える。一つは語頭 1 拍字の語に比して語頭 2 拍字の 3 拍（2+1）は揺れが少なく安定度の高い語構成、ということである。しかし同じく語頭 2 拍字の 4 拍（2+2）は 3 拍（2+1）ほど安定度が高くない。これは拍数が長くなれば一般的に変異を生じやすいということや、1 字ずつの独立性が高くなり呉音漢音の混読語が生じるなど、伝承の線上から外れやすいものを含むためと推測した。本稿の「はじめに」に掲げた、安定的な例と個別的・臨時的な例が現れやすい環境については、上記が一応の結論となる。

もう一つは去声字の振る舞いについてである。去声が 1 拍字より 2 拍字に残りやすいことは先行研究でしばしば指摘されるが、3 拍（2+1）と 4 拍（2+2）で語頭に去—上で揺れる例が見られなかったことはこの指摘の確認となる。加えて、本稿では 3 拍（2+1）に去上—平上の揺れが見られること、および中低形回避のために去去＞去平と変化した例や去去—去平と揺れる例をも確認している。このことから、2 拍字に差された去声点が語頭低高ではじまる和語アクセントのような低起性を有していたためではないか、すなわち字音声調ではなく日本語アクセントの次元において実現した事象ではないかと推測した。以上をもって、和化漢文『新猿楽記』に現れる漢語声点は漢語アクセントを示そうとしたものとして捉えられるのではないかと考えたい。もちろん一つ一つの個別例にはそう考えるのに躊躇されるものも存するので、今後は本文献に現れた安定的な例も含めて他文献と比較する必要があるだろう。

参考文献

秋永一枝 1980『古今和歌集声点本の研究　研究篇上』，校倉書房.

石上英一 2010「尊経閣文庫所蔵『新猿楽記』の書誌」，『尊経閣善本影印集成 42 新猿楽記』，八木書店.

石山裕慈 2005「涅槃講式における漢語声調の変化についての考察」，『訓点語と訓点資料』，第 115 号.

——— 2009「醍醐寺本『本朝文粋』の漢字音」，『訓点語と訓点資料』，第 122 号.

——— 2011「『本朝文粋』における漢語声調について」，『訓点語と訓点資料』，

第 126 号.
上野和昭 2012「『名目抄』所載の漢字二字四拍の語に差された声点について」,『論集』, 第 VIII 号.
奥村三雄 1957「呉音の声調体系」,『訓点語と訓点資料』, 第 8 号.
加藤大鶴 2006「『延慶本平家物語』における声点の資料性–漢語アクセントと和語アクセントによる検討」,『論集』, 第 II 号.
——— 2009「『尾張国郡司百姓等解文』における二字漢語の声点」,『論集』, 第 V 号.
——— 2010「『宝物集』の漢語声点」,『論集』, 第 VI 号.
川口久雄 1983『『新猿楽記』の世界』, 東洋文庫, 第 424 号, 平凡社.
金田一春彦 1964『四座講式の研究:邦樂古曲の旋律による國語アクセント史の研究各論 (1)』, 三省堂.
小松英雄 1971『日本声調史論考』, 風間書房.
酒井憲二 1975「新猿楽記の語彙　序説—付、語彙索引」,『山梨県立女子短期大学紀要』, 第 8 号.
佐々木勇 2009『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　研究篇』, 汲古書院.
鈴木豊 1986「和語の声点資料における差声の体系について—『日本書紀』声点本を中心として」,『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊文学芸術編』, 第 12 号.
沼本克明 1997『日本漢字音の歴史的研究:體系と表記をめぐって』, 汲古書院.
前田育徳会尊経閣文庫（編）2010『新猿楽記』, 尊経閣善本影印集成, 第 42 号, 八木書店.
山本真吾 2010「尊経閣文庫所蔵『新猿楽記』の訓点」,『尊経閣善本影印集成 42 新猿楽記』, 八木書店.

—東北文教大学短期大学部総合文化学科—